
星の町

えもと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の町

【著者名】

えもと

N2599F

【あらすじ】

仕事を辞め、暇を持て余した響子。思い付きで、生まれ故郷を訪れる事にした。全く記憶に残っていない、この「ど」の付く田舎町で出会った、ちょっと変わったな兄弟。彼らと過ごした、一日間の物語。

故郷にて 1 (前書き)

「あいすじ」固く書きましたが、ギャグ要素も全く入れたつもりです。

力を入れず、軽い気持ちで読んで下さい。

「うー、ちむー」

電車を降りて、私が開口一番に言つた台詞は「これだつた。
とつあえず、ホームに立つても寒いだけなので歩き出す。
とある田舎の駅。

駅ビルもなければ、構内にコンビニすらも無い。
かろうじてあつた自動改札を出ると、田に飛び込むのは「田舎」を
絵に描いたような光景だつた。

左手には商店街、正面には申し訳程度に立つてあるバス停の看板。
およそメイン通りとは言い難い道からは、細い路地があちこちに延
びてゐる。
後は住宅と、商店街から外れた店がぽつりぽつりとある程度だつた。
高いビルも、ショッピングセンターも、大型スーパーも無い。

私は、その光景に立ち戻へました。

この分じゃ、ホテルなんて無いかも知れない。
しかし、今日の寝床だけは何としても確保したい。
野宿なんて「冗談じやないし、この寒さで一晩外に居たら凍死する。
それこそ冗談じやない。

そう思いながら、人が行き交つてゐる方 商店街の方に足を運
んだ。

何で女ひとりで、こんな田舎を宛ても無べて迷つてこながと云ひて、

「逃走した」

と云ひのが、しつくり来るかもしねい。

話は、一ヶ月ほど前に遡る。

故郷にて 2（前書き）

ありがとうございました、一話を読んでくださった方、更新が遅くなってしまつて申し訳ありませんでした。

もちろん、書をわざつますので、最後までお付き合いで頂けましたら幸いです。

都内の、某オフィス。

封書を片手に、私は廊下をズカズカと勢い良く歩いていた。

「課長！」

自席でのん気にお茶をすすっている課長のデスクに、バンッと手を突いて封書を突きつけた。

「受理してください！」

私の勢いに押されたのか、据わった手を見て怖かったのか、課長は固まっている。

「え？ これは・・・」

戸惑いつつも封書を受け取り、表に書かれた文字を見て、手を白黒させてこう。

「見ての通り、退職願いです」

「ちよ、ちよっと待つてよ。近藤君。どうして急に・・・理由は？」

「おひささん、もとい、課長は寝ぼけた事を聞いてきた。

「中止書についてあります。読んでください」

私はそれだけ言い放つ。

この会社に勤めて3年。

仕事に慣れてからは、あれこれ任せられるようになつた。
それ自体は良い事だ。

信用もされているのだろうから。

しかし、毎日の残業。

週6日勤務。

休みの日は疲れ果てて出掛けの気力もなく、死んだよつた過ぎした。
おかげで友達とも遊びに行く事も無く、彼氏には「そんなに仕事が
大事なら別れよつ」と宣告された。

これは普通、女が言つ台詞じゃないだろうか。

さすがに、上司に「誰か人を付けるか負担を減らして欲しい」と何
度も掛け合つたが、全て徒労に終わった。

そして、臨界点を突破した私は退職を決意したのだ。

「いや、でも……」

「デモもストも無いです！引継ぎのためにあと一ヶ月は働きます。
それ以上は無理です。会社に拒否する権利はありません！」

「いやいやいや言おつとするの課長の言葉を遮り、その場から立ち去つ
た。

見事に退職を果たした私は、すぐに仕事を探す氣にもなれず、しばらくの間、これと書いて何もせずに過ごした。

が、たすがに飽きてきた。

何もしないことこののが、こんなに苦痛だとは思わなかつた。

それで、どうしようか考えて、旅行にでも行こうと思に立つた。温泉に行くも良し、「そうだ京都に行こう」なんてことを思い出して、観光も良いかな、等とあれこれ思いを巡らせた。

そんな時、ふと生まれ故郷に行ってみようかと思いついた。

「生まれ故郷」なんて言つても、生後一年しかいなかつた私には、その記憶なんて全く無い。

親戚や友人が居るわけでも、懐かしい思い出があるわけでもないが、ちょっと行つてみたいなとは思つていたのだ。この機に行くのも悪くない。

そう思い立つて、ほとんど勢い任せに、ボストンバックに荷物をつめて、ワンルームの狭い部屋を飛び出した。

そして、今この状況下にいる。

飛行機のチケットがその場であつたり取れたから、泊まる場所も何

とかなるだらうと高をくへつていたのだが・・・。
どうやら甘かつたらしい。

都内でずっと過ぐしてきた私は、ホテルなんてそこいら辺にある物だ
と思い込んでしまつっていた。

最悪は「漫画喫茶かファミレスで一夜を過ぐして、ちゃんとしたホ
テルは次の日でも良いか」
などと考えていたのだが、ファミレスどころか、24時間営業のロ
ンギュニタリ無し。

「7時から11時まで営業」

とこう文字を、さつき改札外のロングビームでひつと見かけた。

・・・初期のセブンイレブンじゃないか。

「はあ」

思わず、ため息がこぼれる。

とつあえず、地元の人にでも泊まれそうな所を聞くしかない。

そつ思つて、商店街に来た。

田曜日の方とあつて、それなりに人が多く行き交つていた。

「すみません」

と、優しそうなおばさんに声をかけた。

「はい、何でしょ?」

「あの、この辺りで泊まれる所ありますか?」

私の質問に、おばさんは「うーん」と考えてから、

「この近くには無いわねえ。もつ少し奥地に行くと温泉地だから有るでしょ?」

おばさんは無情にも「無い」宣言をした。

「泊むところが無いの?もしかしたら、私が知らないだけで、どこか有るかも知れないから、一緒に探しよつか?」

と、親切にも申し出してくれたが、遠慮しておいた。

通りすがりなのに、そんな迷惑はかけられない気がしたからだ。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございました」

そう、お礼を言つておばさんと別れてから、さて、どうしようかと考えた。

この町を散策してみたかったのだが、寝床が無いのなら他に行くしかない。

女ひとりで外で過ごす度胸など無いし、先にも言つたが、この寒さで野宿なんかしたら凍死するのは間違いない。

とすると、もう少し探してみるか、温泉地とやらまで行くか・・・。どうせなら温泉にでも浸かって、散策は明日また出直せばいいか。

そう決めて駅に向かつて歩き出直せうとした時、

「泊るといい、探してるの？」

唐突に声をかけられた。

見ると、年の頃は10歳前後の小学生らしき男の子が、私を見上げていた。

「うふ、そうなんだ。どうか知らない・・・よね」

少しかがんで、男の子の顔を合わせて聞いてみる。

まあ、「知らない」と言われるのは見えているのだが。

「おれ、知ってるよ。泊まれるといい」

男の子は予想外の事を言った。

「本当に？」

私の言葉に、こくりと頷き、

「ついてきて」

男の子は、そのままながら歩き出した。

おばさんは知らなかつたのに、こんな子供が知つてゐるのだろうか？少し疑問に思つたが、まさか嘘を吐いてゐるとも思えず、とりあえずは後に付いて行く事にした。

行き着いた先は、さつきの商店街から歩く事およそ5分。

ログハウス風の外観。

入口の周りには花やグリーンが飾られている。
この田舎町には似合わないようなオシャレな建物だったが、町並み
から浮く事は無く、不思議と馴染んで見えた。
おそらく、木の優しい感じがそつとせているのだろう。

しかし、大きな問題がひとつ。

風に揺れる看板には「珈琲」と書かれていた。

そう、ここはどう見ても喫茶店だった。

「ここ?」

一応、聞いてみると、

「うん。ここだよ」

あつさりした返事が返ってきた。

・・・違つ。

「ここは喫茶店であつて、寝泊りする場所じゃない・コーヒーを飲
んでくつろぐ場所だつ!」
と、大人相手ならツッコミを入れる事も出来るが、相手は子供だ。

親切心でしてくれたのに、抗議なんて出来よつはずも無い。

まあ、大きな勘違いをしているのだが。

立ち廻く私を他所に、ここに来るまでに「北斗」と名乗った男の子は、扉を開けて中に入つて行く。

チリンチリン　　とベルが鳴つた。

仕方なく後に続くと、店内も外観同様シャレていた。

蛍光灯の白い光ではなく、オレンジっぽい優しい色の照明。全て木で作られた、イスとテーブル。

ディスプレイに、アンティークらしき物が飾られていたが、それらは存在を主張しすぎず、店内に納まっていた。

壁に飾られた絵だけが鮮やかな色をしていたが、この空間と上手く溶け合つて、店内を明るく見せる役割をしていた。

喫茶店にて 2 (前書き)

今回から、一話に載せる文章の量を増やしました。
読みにくければ、」指摘ください。

「おかえり、北斗」

店の奥から、男の人の声がした。

「ただいま。拾つてきちゃつたんだけど、今日ついに置いても良い？」

と、北斗が聞く声がする。

「またかい？」

話しながら、二人して店の奥から出て来た。
そして、声の主と目が合つた。

おそらく、私と同じか少し上。20代半ば位の男の人だった。

しばし、沈黙が落ちる。

「北斗、人はね、拾つてきただって言うんじゃないよ。連れてきたって言うんだよ。前にも言つただろ?」

と、彼は北斗君に言つた。

論点が明らかにずれている。

全力で突つ込みたかつたが、何とか堪えた。

「すみません。北斗がご迷惑をかけたみたいで・・・あ、どうぞ、
座つて下さい。今、コーヒー淹れますね」

セーフティで、カウンターの奥に消えてしまった。

「どうする事も、何かをこうつ事も出来ず、どうあえず言われたままにイスに座つた。

北斗君は、あたしの正面に座りながら奥の男の人に話しかける。

「泊るといふ無いって言つから、拾つて・・・連れてきたんだナゾ。英兄、家に置いても良いでしょ？」

「それは、構わないけど・・・」

言いながら「英兄」と呼ばれた彼は、コーヒーを持って出していく。

「セーフ」は構わなくないでしょ！？」
そう言いたい。

彼は、私の前にコーヒーを置いて「セーフ」と進めてくれた。

「セーフも」

そう言つて受け取つてから、私は話し始めた。

「あのですね。なんだか凄い話になつてますけど、これは北斗君の勘違いと言いますか、あたしの勘違いといいますか」

「勘違いじゃないよ。泊まるといふ無いって言つたじゃん」

私の説明を、途中でぶつちぎつて北斗君が抗議の声をあげた。

そんな私達を見ながら、彼は笑顔のまま、

「あ、コーヒー冷めない内にドリッソ」と言つた。

完全にペースを崩されている。
しかし、そう言われて飲まない訳にもいかず、砂糖をひとかけら入
れて、コーヒーに口をつけた。

「おーしゃー・・・・」

自然と、そう呟いていた。
結構コーヒーは飲むほうだが、心からおいしいと思ったのは初めて
かも知れない。

「英兄のコーヒーは世界一なんだよ」

そう言いながら、北斗君は砂糖もミルクも入れないで、そのまま飲
んだ。

「ブラックで飲むの?」

驚いて声をあげた私に、

「北斗はもつと小さい時からコーヒー飲んでますから、慣れている
んでしょうね。なかなか味にうるさいんですよ」

彼は苦笑しつつも説明して「それで、さつきの続きですが」と話
し始めた。

「もし、言い難い事情があるなら、無理に言わなくても良いですよ?
? 今は泊まっていつて頂いても構いませんし」

「ひり」と笑いながら、そう言った。

私は慌てて事情を話す。

「いえ、そういう訳には・・・。実は、泊まるを探している時に、北斗君に「泊まれる所を知ってる」とて言われて付いて来ただけなんです。てっきり、宿にでも連れて行ってくれるのかと思っていたんですけど」

「そうだったんですか。この街には宿はないですよ。観光地でもないですね」

彼の言葉に、あのおばさんの言った事は正しかったんだと確信した。やっぱり、温泉地に行くしかないか。

そう思い、コーヒーを飲み干した。

「いらっしゃいました。あの、おいくらですか?」

そう言って私は立ち上がる。

とつとと宿探しを再開しなければ。

遅くなつて、宿が取れませんでした。じゃあお話をならない。

「北斗が連れてきた、我が家のお客さんなのでお代は要りませんよ。それより、どちらに行くんですか?」

「温泉地があるつて聞いたので、そこに行こうかと

私の言葉に、彼は申し訳無をしつゝ

「恐らく、途中までしか行けないですよ。今からじゃ乗り継ぎが無くなっていると思います。なにしろ、ここから4時間はかかる様な奥地ですから・・・」

私は、彼のその言葉に絶句した。

今から行つたとして、順当に行ければ到着は10時のはずだ。
そんな時間ですら、電車が無くなるとは・・・。

いくら田舎とはいえ、それは無いだろ?と思つたが、残念ながら、彼の表情を見る限り「冗談ではなさそうだ。

「どうやって今日を乗り切れば良いのか・・・。

「どうして下調べくらいしてから、家を出なかつたんだ」と自分を呪つたが後の祭りだつた。

立ち上がつた格好のまま固まつてゐる私を見て、

「使つてない部屋が一つあるので、良かつたら泊まつて行つて下さい。家は僕と北斗しか居ないから気を使わなくて良いと思いますし。なにより、この寒さの中で外で過ごしたら、たぶん凍死しちゃいますよ」

彼はそう言つた。

「だから、泊まれるところ知つてゐつて言つたじやん?」

北斗君も便乗してそんな事を言つた。

おかしい。
このふたり。

いや、「英兄」と呼ばれた彼はおかしい。

普通、行きずりの正体不明の人間なんか泊めないだろう。しかし、しばし逡巡した後に、腹をくくつてお世話になることになった。

彼らの感覚に巻き込まれて、自分の感覚も変になつてゐる様らしい。だつて、見ず知らずの人家に泊まるなんて、普通だつたら考えられない。

でも、この際それは気にしない事にした。

それは「凍死だけは避けたい」そんな理由からだつた。

「あの、じゃあ一晩だけお世話になつても良いですか？」

一応、聞いてみる。

「ええ、何もあつませんが、ゆつくりしていつて下さい。えつと、あ、自己紹介して無かつたですね。僕は、藤堂英理です」

彼は立ち上がり、右手を差し出しながらそつ名乗つた。

「私は、近藤響子です」

私も名乗つて、彼の手を握り返す。

「どういふ字を書くんですか？」

と、彼が聞いてきた。

「響くに子供です。藤堂さんは？」

「いい名前ですね。あ、僕の事は英理でいいですよ。英語に理科つて書いて書きます」

「じゃあ、あたしも下の名前で呼んで下さい。英語に理科つてなんだか、思いつきり理系が出来ますって言つ感じの名前ですね」

「よく言われます。名前は理系なのに文系科目を専攻してたから、からかわれましたよ」

苦笑交じりにそんな事を言つた所で、

「ほくとは、北斗星の北斗！」

と言ひながら、握手したあたし達の手の上に、バシッと手を載せた。三人で「よのしぐ」と言ひながら、変な握手をした。

いつして、すっかり彼らのペースに巻き込まれ、今晚ここでお世話になる事になった。

ほほ口が落ちてしまつた夕方の商店街を北斗君と並んで歩いていた。

と並つのも、北斗君がおつかいを忘れて手ぶらで帰つて来た為だつた。

私と会つた時、彼は夕飯の買い物の途中だつたらしく、私を連れてそのまま家に帰つてしまつたのだ。

それで、買い物をするべく一人こうして商店街に戻つて来たという訳だ。

「何が食べたい？」

そう聞く私に、

「カレー！」

と北斗君は元気良く答えた。

うむ。

冷蔵庫に何があるかチェックさせてもらつてから来れば良かつたなと思つたが、もう遅い。

全部材料買い集めて帰るしかないか。

そう思つて、八百屋と肉屋、小さいスーパーらしき所に寄つたのだが、北斗君はここでは有名なのか、行く先々で声をかけられた。

「今日はたくさん買つね。じゃ、タマネギはサービスしちゃうよ」

「あ、キレイなおねえさんなんか連れて、どうした？」

「お、キレイなおねえさんなんか連れて、どうした？」

などなど。

すれ違う人とも、何人かと軽く挨拶をしていた。

しかし、しばらくして、北斗君が特別という訳ではないという事がわかった。

良く見れば、あちこちで同じような姿が見られる。

田舎独特の「町民みんな知り合い」という感じだろうか。

都会では信じられない光景だ。

近所の人ですら、ろくに挨拶なんてしない人もいるし、同じマンションにどんな人が住んでるかなんて、全員は把握していない。たつた、9部屋しかない小さなアパートなのに。

そのギャップに少々面食らいつつ、買い物を終えた私達は、あの喫茶店に戻ってきた。

「ただいま」

と帰ってきた私達を、

「お帰り」

そう言って、英理さんは笑顔で迎えてくれた。

英理さんは、私達の荷物を見て、

「今日のメニューは何にしたんですか？」

そう聞いてきた。

「カレーです。北斗君が食べたいって言つから。あ、キッチンかりますね」

言いながら、私はカウンターの奥に入った。

そこには、たくさんのコーヒー豆とそれを落とす器具、フライパンや鍋なんかもあった。

料理が出来る環境はバツチリ整っている。

感心してキッチンを眺めていると、英理さんが追いかけて来て、

「あの、僕がやりますから」

少し慌てたように言つた。

「泊めてもうんだから、このくらいはやりますよ。作るの結構好きなんで、それなりに出来るつもりなんんですけど」

笑顔で答える私の言葉に、

「でも……」

と何か言いかけたが、

「一応、味の保障はしますよ。友人にも好評だつたんで、大丈夫だと思います」

笑顔全開で言う私に折れて、

「じゃあ、お願ひしますね」

と引き下がつた。

「笑顔全開」攻撃は、時に、有無を言わせない絶対的な効果があるのだ。

さすがに、いきなり泊めてもいいのだから、何もしない訳にはいかない。

お金払つて泊まるホテルじゃないんだから、出来る限りの事はしないと申し訳が立たない。

一宿一飯の恩を、仇で返すわけには行かないのだ。

と、私は心中で拳を握つた。

キッチンから追い出された彼は、店内で本を読み始めた。

そんな姿を横目で見つつ、袋から材料を出していると、今度は北斗君がキッチンに入ってきた。

「どうしたの？おなか減つた？さすがに、まだ出来なによ

そつ声をかけた私に、

「そうじやなくて、おれも手伝つ

と、言いだした。

この年頃の男の子にしては、ずいぶんと感心した事を言つ。

「えらいなあ。それじゃ、手伝つてもらつちゃおうかな。これ、皮むいてくれる?」

そう言つて、じゃがいも洗い、それと一緒にピューラーを渡した。包丁を持たせるのは危ないが、これなら手を切る心配もないだろ?。

北斗君は「うん」と大きく頷いて、せつせと皮むきを始めた。

その横で、私は支度をしていく。

「響子ねえちゃんは、どこから来たの?」

今度は、渡した人参の皮むきをしながら、そんな事を聞いてきた。

「東京だよ」

「行つた事ないや。どんなとこ?」

「うーん。高いビルとかあって、人も沢山いて・・・何でもある便利な所かなあ。でも、何か欠けてるのかもね」

私はそう答えた。

何か、大事なモノが欠けてしまっている。さつき買い物をしながらそう感じた。

それは、人ととの交流とでも言うのか。

雑踏の中ですれ違つ人誰もが、お互に無関心で。

誰かが道で寝っていても、座り込んでいても、泣いていても、見て見ない振りで。

この町では、あつとそんな事は無いんだね!」

私の言葉に、北斗君はわからないといった風な顔をした。

「どうこう意味?」

「この町はステキだねって意味。来て良かった」

「響子ねえちゃんは、何でここに来たの?」

北斗君が、そう聞いた時、「北斗」と彼を優しく咎める声がした。

「つ、『めんなさい』」

英理さんに叱られて、北斗君は小さく謝る。

おわりく、英理さんは氣を使つてくれたんだろ!。

そして、英理さんの言わんとした事が、北斗君にも解つたらしく。まだ、ほんの子供なのに。

確かに、「ワケあり」と思つのが普通だね!。

里帰りでもない。

友人に会いに来たわけでもない。

泊まる所も無く、女一人で、田舎町をさまよつていたら・・・怪しい。

今更ながら、変な誤解をされているんじゃないだろうかと不安にな

つた。

これは、解いておかなければ。

「別に、言いたくない『のっぴきならない事情』がある訳じゃないから、構いませんよ」

と、カウンターの外に声をかけてから、隣にいる北斗君に話しかじめた。

「この町はね、私の生まれた所なんだって。って言つても、一歳までしか居なかつたから覚えてないんだけどね。原点に戻つてみようかなつて思つて来てみたつて訳。自分探しの旅つて感じかな」

そして最後に「思いつきなんだけどね」と付け加えた。

私の言葉を聞いて、北斗君は「つーん」と考えていた。

その姿を見て、少し笑つてしまつた。

「何でわざわざ？」

と、不思議そうに聞いてくる。

「かわいいなあと思つて」

「おれ、もう子供じゃないもん。かわいいって言つな

頬を膨らませて不満そうな顔を見せ、そう抗議した。

「子供じゃないって言つてる内は、子供なんだよ」

と思つたが、言つと益々機嫌を損ねそうなので、これは言わないで

おいた。

「あはは、『じめんね。そつだなあ・・・』

ビービー言えれば解りやすいか考えてから、続きを口にした。

「毎日、毎日、お仕事ばかりで疲れちゃったの。だからね、辞めて逃げてきちゃったのね」

北斗君は私の説明を真剣に聞いている。私は手を動かしながら、話を続けた。

「で、これからどうしようかなって考えて、とりあえず、旅行でもして気分転換しようかなって思ったの。それで、覚えてないけど自分が生まれた場所に行つてみようかなって思い付いて、ここに來たつて感じかな。何となくわかった?」

真っ直ぐに私を見て、北斗君はこくへつと頷いた。

「なんとなくだけじ、わかつた」

そう言つた彼の顔を見て、本当に何となくながらも理解してくれたのだろう。

そう感じた。

子供に説明するには、難しい話だったと思つたが、なかなかどうして賢い子だ。

「響子ねえちゃんも、いろいろ大変なんだね」

北斗君は、そう言った。

「も」と言つた、北斗君の言葉が気になつたが、そこは聞かない事に決めた。

そして、ここは話題を変える事にした。

これから食事だというのに、暗い雰囲気では良くない。

これでは、おいしい物も不味くなつてしまつ。

せつかく作つたのに！

そう思つて、

「ああーっーー！」

と大きな声をあげた。

「手が止まつてゐーそろそろ人参も入れたいんだけどなあ・・・」

その言葉に、北斗君はハツとしたように、人参の皮むきを再開した。

その必死な様子を見て、私はちょっと笑つた。

また「子ども扱いするな」と怒られてしまつから、気付かれないように。

結局、夕飯にありつけたのは、夜の8時を回つた頃だつた。

自分で言つのも何だが、カレーの出来は結構良かつた。

その証拠に、北斗君は「おいしい」と言いながら平らげてみせた。

「そう、良かつた。おかわりは？」

そう聞く私に、頷きながらカレー皿を差し出した。
これは、食べるつてことか。

笑顔でお皿を受け取り、おかわりをよそひ。

「はい。こつぱい食べて、おつきくなるのよ」

言いながらおかわりを渡すと、「うん」と大きく頷いてみせた。

再びカレーを食べ始めた北斗君の横で、

「響子さんは料理が上手なんですねえ。よくされるんですか？」

と、英理さんが聞いてきた。

そこまで感心したような声を出されると、いくらなんでもオーバーな気がする。

小学校の調理実習の方が、もっと高度な物を作つていいはずだ。

私は苦笑しつつ、

「大袈裟ですよ。カレーなんて小学生でも作れますよ。でも、料理はしますね。一人暮らし

もので、作りないと食べられませんからね」

そう答えた。

「そうだったんですか。でも、自分で作ってばかりいると、たまには人が作った物が食べたくないませんか?」

「なりますねえ。誰かの手料理が恋しくなりますよね」

「今日、久しぶりにキッチンに立たずにおいしい料理が食べられて、なんだか悪い気もするんですけど、嬉しくて。ありがとうございます」

彼はそう言つて笑つた。

「いえ、一宿一飯のお礼には届きませんけど、喜んでもらえたなら良かつたです」

私も笑顔でそう返すと、

「こないだ、学校で『ちんじゅ おーーすー』叫つたから、今度はおれが作る」

北斗君は元気良く、そう宣言した。

「ほんと? それは楽しみだわ」

「キッチンは壊さないよ! にね」

私の言葉に続けて、本気か冗談か、英理さんは朗らかに言った。

その言葉に、北斗君はちょっとびんの悪そうな顔を見せる。
前科があるのか・・・。

「大丈夫。次は上手くやるよ」

「」から来たものか、北斗君は自信満々に言ひ。

そんな風に、和やかに時間は過ぎていった。

食事の後、

「宿題は？」と英理さんに聞かれ、渋々と北斗君は自室で宿題を片付けていた。

英理さんは力チャ力チャと皿洗いをしていく。
私はといつと、その横でせっせと皿拭いていた。

「いいって、料理も提供してるんですか？」

この店は、喫茶店と言つ割には調理器具がかなり充実している。
喫茶店、兼台所として使つてている様なので普通かもしけないが。
二階には寝室しかなく、店はリビングとダイニング代わりらしい。

「ええ、と言つてもちよつとしたお菓子とか、軽食くらいですけど」

彼はそう答えた。

「へー。英理さんが作つてるのはすよね？」

「ううですよ。何とかお客様にも提供できる腕になつましたし」

彼は笑顔で答えて、最後に「まだまだですけどね」と謙遜の言葉を付け加えた。

「すいになあ。お店の経営もやって、料理も作つて。大変そう」

「両親を亡くしてから、知識も無く、そのまま店を継いだんですけど

ど、料理もコーヒーも好きなので、趣味がそのまま職になつたという感じですね。それなりに苦労はありますけど、好きでやつてることだから楽しいですし、僕には向いてると思うんですよ

「うひー、うひー」と笑つた。

そんな彼を見て「しまつた」と思つたが、もう遅い。

この家には、両親が居ないんだろうという事は予測がついていた。北斗君の歳を考えて、お兄さんと一人暮らしは、少しばかり不自然だからだ。

だから、その事には触れない様に気を付けていたのに・・・。自分の不用意な発言に後悔しつつ、無言になつた私に、

「じつしまつた？」

と英理さんが聞いてくる。

「あ、嫌な事を、言わせちゃつたと思つて、その・・・」

はつきり言つのも悪い気がして、口ごもる私に、彼は何が言いたいのか解つた顔を見せて、

「もしかして、両親の事ですか？」

念のため、といった感じで聞いてくる。

「ええ。すみません、変な事を言わせてしまつて」

そう言つた私に、

「全然、気にする事は無いんですよ。あれは、もう五年も前の話です。」

何故か彼も謝つて、「でも」と続けた。

「全然、気にする事は無いんですよ。あれは、もう五年も前の話です。」

「わー。言わなくて良いですかー。」

何事が説明しようとする彼の言葉を、私は途中で遮った。

「聞きたいたとか、言わせようとか思つたんじゃなくて、言つたくなり事言わせちゃつたかなつて思つただけで・・・悪い事したなど。だから、言わなくて良いんですー。」

自分でもおかしくなり、必死になつて、話を中断させた。

別に、身の上話に興味があるわけでも、聞きたいわけでもない。彼だって、話したいわけじゃないだろう。

もう過去の事だとしたつて、話して良い気持ちになる話題じゃないのは確かだ。

だから、言わせたくないし、聞きたくない。

私の必死な姿に驚いたのか、英理さんは少しキョトンとした顔を見せた後に、

「セレニまで言つなり、言わないでおきますね」

そう言つた後に、「でもね」と付け加えて、

「両親が居ないのは残念ですけど、今、幸せなんです。だから、気を使つてくれたのは嬉しいけど、響子さんが悪い事を聞いたつて思うことは無いんですよ」

微笑みながら、そう言つた。

氣を使つたつもりが、逆に氣を使わせてしまつていて。

やつぱり、悪い事したなと思つ反面、何だか羨ましくもあつた。ハツキリと「今、幸せだ」と言つに切れる彼が。

「幸せ・・・かあ」

ぽつりと、半ば無意識に呴いていた。

私は、きっと恵まれている。

両親もいるし、友達もいる。生活に苦労しているわけでもない。そんな自分を不幸だとは決して思わないが、「幸せか」と問われたら、胸を張つて「幸せだ」と言つ切る自信が私には、無い。そんな事を考えていると、

「そうだ！」

唐突に、彼は声を上げた。

「へ？ な、なんですか？」

大きな声にビッククリして、裏返った声で聞くと、

「あ、それだけ拭いちゃつてもらいますか？」

彼は質問には答えずに、そう言った。

話の飛び方が突然すぎて、もう一度、何事が聞き返すことも、突っ込みを入れる事も出来なかつた。
やつぱり、どこか掴めない人だ。

そう思いつつも、彼の言葉に素直に従つて、手に持つていた最後の一枚を拭き上げると、

「ちょっと、来てください」

英理さんは言いながら、一階へと続く階段を上がつて行く。
一体何だらうと思いつつも、私は黙つて付いて行つた。

彼は階段を上り、廊下の突き当りに来た所で、天井に棒らしき物を突き立てて、グツと引くと、

バコンッ

派手な音を立てて天井の一部が開く。

と、そこからせりて上へ続く階段が現われた。

「こ、こ、は、忍者屋敷か。

そう思いつつ、ポカーンと見ている私を他所に、

「あ、足元に気をつけて下さいね」

彼はそう注意を促しつつ、現われた階段を上つていく。

とりあえず、後に続くという選択肢しかない私は、ソロソロと真っ暗な階段を上つた。

上につきた先にあつたのは、小さめの屋根裏部屋らしき空間だった。

真っ暗だった階段とは違つて、部屋の中は不思議と明るく感じられた。

電気も点けていないのに、だ。

「上、見て下れー」

そう言われて顔を上げ、部屋が明るい原因を理解した。

斜め上に取り付けられた大きな天窓から、月と星の光が差し込んでいたのだ。

「うわあ・・・」

それを見て、私は思わず声をあげる。

満点の星空に、半月が大きく輝いて見えた。

私が住んでいる所から見えるものとは、全く違う夜空だ。

「星つて、こんなに明るかつたんですね。知らなかつた・・・」

「田舎だから、街灯もあまりないですしね。だから明るく見えるんだと思いますよ」

「」ちなみに明るく輝く星なんて、初めて見ました

私が窓の外を見ながら言つと、

「知っていますか？あの星の光が僕たちの目に届くのに、何億年という時間がかかる事。そんな時間をかけて、あの光はここまで来てるんですよ」

彼はそう言った。

「聞いた事はあります。100年だつて長いのに、そんなの想像もつきませんね」

「気の遠くなるような時間ですよね。それに比べれば人が過ごす時間なんて、きっと瞬く間です」

「それじゃ、あつという間ですね」

「ええ。宇宙の大きさに比べたら、僕はとても小さい存在なんだつて感じました。昔、落ち込んでいた時に星を見ながら思つたんです」

彼はそこで一度、言葉を切つて、

「短い時間しかないんだから、儘んで過ごすよりも楽しく生きて行くつて。あの星の様に明るくこられるよう」

私は黙つて話を聞いた。

「もちろん思い悩む事もありますけど、そればかりじゃ、もつたないような気がして。出来るだけ好きな事をして、笑つて過ごしてゆけたら幸せだなって」

彼は、穏やかに笑いながらそう言った。

「好きな事・・・か」

呟きながら、私は考える。

私の好きな事、これからやりたい事とは何だろ。ひ。日々、生活に追われるばかりで、そんな事を考える余裕なんて無かつた。すぐに浮かんで来ない自分に、少し悲しくなる。

「今すぐ見つけなくとも、良いんじゃないですか？」

黙つて考える私に、彼はそうひと言つた。

「必死に考えてたの、バレました？」

「顔に書いてありますよ」

少し笑いながら、彼は続ける。

「今の響子さんは、そういう時なんだと思こます」

「悩む時期つて事ですか？人生は短いのに？」

「休憩とでも言つた方が良いかもしれませんね。言つたじゃないですか、「悩む事もあるけど」って。悩まない人なんていないと思いませんか？でも、それだけじゃダメだと思つたんです。悩んだら、進んでいいかないと」

彼の言葉を聞きながら、私は、自分が戸惑つていた事に気が付いた。

突然、得た自由というものに。

自由な時間が無くて辛かったのに、いざ手にしてみると、どうして良いか解らなかつた。

何かしたい事があるわけでもない。

先が何も見えない、何にも縛られていな事が不安で仕方が無かつたのかかもしれない。

我ながら、何とも矛盾していると思つ。

「でも、それって、何でも出来るって事かな」

呟く私を見て、彼は何も言わずに微笑んだ。

私も、あの星の様に、明るく生きてゆけるのだろうか。
この先に、何かを見つける事が出来るのだろうか。

「幸せだ」と胸を張つて、日々を過ごせる様になるだろうか。

先が見えない不安はある。

それでも今なら、何か見つかる様な気がした。

空を見上げながら、私は心が軽くなつたのを感じていた。

階段を下つると、まだオープン前の店内には、良い香りが漂つていた。

「おはようございます。ゆっくり休めましたか？」

「響子ねえちゃん、おはよう」

笑顔でフライパンを振りながら、そう言つた英理さんの後に、北斗君が続けた。

「おはようございます。おかげでゆっくり眠れたんですが・・・すみません、すっかり寝坊してしまって」

私は一人の言葉に、力なくそう言つた。

まさかの大寝坊・・・とんでもない大失態だ。

「ゆっくり眠れたなら良かつたです。もしかしたら眠れないんじやないかと思つて・・・。ほら、枕が変わると眠れなくなるって良く言つじやないですか」

「そんな事ないですよ。良い部屋だったんで気持ちよく眠れました。ありがとうございます」

英理さんの言葉に、そう返す。

幸か不幸か、私は枕が変わったからといって、眠れなくなる程デリケートには出来ていらないらしい。

それに、部屋は落ち着いた感じで、使い心地はとても良かった。

「ナニつてもいいって良かつたです。さて、朝ご飯こしまじょうか」
彼は言いながら、テーブルにパンとスクランブルエッグを並べてくれた。

「響子ねえちゃん、ご飯食べたら町を案内してあげるよ

席に着きながら、北斗君がそう言った。

「あれ?学校は?」

「休みだよ

「今日つて、月曜日じゃなかつたつけ?」

冬休みにはだいぶ早い筈だけど・・・と考えていると、

「今日は祝日ですよ。ハッピーマンデーですね」

英理さんが説明してくれた。

「そつか、すつかり忘れてた。じゃあ、お願ひしようかな

町を散策したかったから、案内役がいるのはありがたい。

「とつておきの場所があるんだ。楽しみにしてよ」

私のお願ひに、北斗君は得意げ言つて見せた。

「ひとつおきの場所」とはどんな所か気になつたが、敢えて聞かないでおいた。

行くまでのお楽しみといつヤツだ。

そして、三人で「いただきます」と声を合わせて、朝食に手を伸ばした。

私は、えつひひおひちら坂を登つて いた。

英理さんは店があるので、北斗君と二人で散策に出掛けで今に至る。

この町は、どうやら駅から少し外れると、坂ばかりの町らしい。緩やかな長い坂道が、縦横無尽に伸びて いる。

他にあるものといえば、民家。

それ以外には、特にこれと言つたものは見当たらない。

ひたすら歩き始めて、約30分あまり。
一体どこに行くつもりなんだろうか。

「ちよ、 北斗君、 あとどのくらいこへど」まで行への?」

私の上がつた息が、白く空に溶けて いた。

「 もつちよつと、ほり、見えたよ」

言いながら指をさす方に見えたのは、古い建物だつた。

そして大きくも無い長方形の一階建ての建物は、長い間、雨風にさらされて いたせいだろ?、ぼんやり汚れた白い色をして いた。

その周りには木々と広場がある。

遊具の無い公園と言つた感じだろ?か。

「 ははは?」

「公民館だよ」

北斗君はやうやく答えて、やつやれと歩き出す。

子供は元気だなと思いつつ、北斗君の後に続いて入り口をくぐるべし、

「おじちゃん、おはよ。今日は誰も使ってないよね？」

北斗君は、管理人と思しきおじさんと話しかけた。

「ああ、おはよう。」の間は、運が悪かったね。普段は北斗ぐらじしか使わないのにね」

「ほんとだよ。でもその後、あの人から楽譜ももらつたから、ラッキーランも」

「やうかい。それは良かったね。おや、今日はお連れさんがいるんだ？」

そつまつて、おじさんは私の方を見た。

「じつも」

私は、おじさんに「コトと頭を上げて会釈をする。

「どうも、北斗の知り合いでですか？」

「ええ、まあ。そんな所ですか」

私が曖昧に返事をすると、

「泊まるといつて無かつて直つから、昨日拾つたんだ」

北斗君はそう説明した。

いや、間違つてはいなが、何かが足りない。

「またかい？」

おじさんは北斗君にそう聞いた。

「また？」とはどういう事だらう。

前にも誰か「拾つて」来たんだろうか。

そういえば、英理さんは私を見ても、あまり驚いた様子は無かつた。あの家では、日常的に人を拾つてきているのだらうか？

そんな事つてあるもんなんだらうか。

いや、普通は無い・・・はずだ。

が、この兄弟ならやりかねない。

などと考へてみると、

「まあね。それより、おじさん、鍵かしてよ」

北斗君が言つ。

「ああ、はい」

「ありがと。かりてくれね。響子ねえちゃん、じつ」

おじさんから鍵を受け取り、奥の部屋へと入つていく。

私も続いて入ると、そこには一台のグランドピアノがあった。

「ピアノ弾けるの?」

「ちよつとだけどね

質問に答えて、ピアノの蓋をガタンと開ける。

「もしかして、ここのおきの場所って、ここへ」

「わづだよ。ここのおきから、町が見えるんだよ。」

言われて窓の外を見てみると、全部とは言わないが、かなり広範囲の町が見渡せた。

覚えてないの、ビリが懐かしさを感じさせる田舎の町並みが。

「おれや、じりでピアノ弾いてると、いやな事とか忘れちやうんだ。響子姉ちやんは、何か弾ける?」

北斗船はわづ言こながり、鍵盤をこくつか指で弾いた。

「うーん。『ねこらじゅつた』くらこね」

私がそつ返すと、

「じゅあ、一緒に弾いてみよつよ

笑顔でやつ言つた。

「ええ? ちやんと弾ける自信がないなあ

「大丈夫だつて。やつてみようよ

言いながら椅子の半分を空けて、ぽんぽんとその場所をたたいた。

どうやら、座れつてらしい。

まあ、自信は無いけど、やつてみるか。

ピアノの長い椅子に、二人で並んで腰をかけた。

「セーの」

とタイミングを合わせて、同時に鍵盤をたたいた。

いつ以来だらうか。

ピアノなんて触るのは。

弾けるかどうか怪しかつたが、意外とちゃんと弾けて驚いた。

『うやん、うやん』と最後のオチまでつけて、

「うやんと弾けるじやん。上手だつたよ

北斗頼さんと書つてくれた。

「ありがと」

「うひ~楽しかつた?」

「うそ。一緒に弾くのうて面白こんだね。よく楽しかつたよ。北斗君は?」

「おれも、楽しかつた!」

笑顔で答える彼に、

「ありがとね」

私がもう一度、お礼を言つと、

「それば、やつを聞いたよ?」

小首をかしげて、やつ言つた。

「わつわのせ、ほめてくれてあつがとう」

「じゃあ、今は?」

「優しくしてくれて、あつがとう。元気付けてよつとしてくれたんだ
よ。違つ?」

私の言葉に、ちよつと考へてから、

「昨日、疲れちゃつたつて言つてたから・・・。ソリでピアノ弾け
ば元気になるかなあと思つて。元気になつた?」

そつと北斗君を、私はぎゅつと抱きしめた。

「わつーなに?」

「いながら、私の腕の中でジタバタしている。

「いや、いこ子だなあと思つて。あ、なんか弾いて欲しいなー」

私が言つと、

「じゃ、じゃあ、離してよ」

ちゅうと照れた様に、抗議の声をあげた。

手を離して立ち上ると、

「どなんのが良い？」

と聞いてきた。

「北斗君が、好きな曲が良いな」

私の言葉に、少し考えてから、

「じゃあ、おれの一番好きな曲、弾くよ？」

やつぱり、うなずくあたしを見てから、鍵盤に手を伸ばした。

曲は「あいあい哩」だ。

北斗君の指が、リズムを刻む。

それを聞きながら、窓の外の青い空を眺めた。

「お世話になりました、本当にありがとうございました」

私はボストンバッグを抱ぎながら、喫茶店の店先で頭を下げてそう言つた。

「いらっしゃりや、カレーおこしかつたです。いらっしゃりまでした。気をつけて帰つてくださいね」

やつぱりてくれたのは、英理さんだ。

「やつぱり、いれば良このに・・・」

北斗君は、残念そうに言つた。

「ありがとね。でも、帰らなきや。また来ても良いかな?」

「うん。絶対だよ。今度はおれがご飯作るから」

「楽しみにしてるね」

「はい。指切りげんまん」

小指を絡ませて、北斗君と指切りをする。

そんな私達を見ながら、

「ぜひ、また来てください。冬も良くてすけど、夏の星空も綺麗な

んですよ。町の名前が「美星町」ですからね。夜空を見上げるには最高の町ですよ」

英理さんが言った。

「確かに、そうですね。あの星空は、本当に綺麗でしたから・・・。また、お邪魔させてもらいます」

私は笑顔で言つて、「それじゃ」と付け足し、駅の方へ足を向けた。

少し歩いてから、振り返ろうとか迷つて、やめた。

代わりに空を見上げると、太陽の白い光がまぶしく見えた。

いい天氣だ。

今夜もきっと、綺麗な星空が見られるだらつ。

東京はどうだろうか。

少なからず、星は見えるかもしね。

帰つたら、じつくり天体観測でもしてみようか。

そんな事を考えつつ、風景を眺めながら歩くと、あつといつ間に駅に着いた。

電車を待ちながら、両手をぐつと上に突き上げて、大きく伸びをした。

このまま、飛べそうな気がするな。

なんて馬鹿なことを思つた時に、ホームに電車が滑り込んで來た。

星の町 4 (後書き)

最後に、Hピローグ的なものを載せてお終いです。
あと一話、お書き合いいただければ幸いです。

手紙

北斗君、英理さんへ

お元気ですか？

ご無沙汰しています。

あれから半年以上も過ぎてしまっているんですね。

相変わらず、拾い物ならぬ、拾い人でもしているんでしょうか？

私はといふと、実はイタリアにいます。

パーティションになるべく、留学中です。

驚いたかもしませんね。

私も正直、自分の事ながら驚いています。

半ば思いつきで留学を決めてしまいましたから。

でも、美星町に行つたのも思い付きでした。

それで、ステキな体験が出来たんだから、私のこの行動もなかなか悔れないかもしません。

現に今、楽しい日々を過ごしています。

最初は、言葉も通じず、上手くいかない事も多くて大変でしたけどね。

今度、一時帰国することになりました。
その時には、またお邪魔したいと思っています。
北斗君との約束を果たさないと。

それに、夏の美星町に行ってみたいですね。

あの時、一人に会わなければ、私は今頃何をしていたんだろうかと、時々考えます。

今、こうして過(じ)しているのは、一人のおかげだと思つています。

本当に、ありがとうございます。

お礼に、イタリア仕込みのお菓子を貰(う)ちます。
焼き菓子は、なかなか上手に作れるようになつたんですよ。
楽しみにしていてもらえれば、嬉しいです。

それでは。

追伸

同封した写真は、イタリアの空です。
ここもとても綺麗だけど、やつぱり美星の空が懐かしく思ひます。
空は一つに繋がつてゐるはずなのに、同じではないんですね。不思議です。

美星町から星空を見るのを、楽しみにしています。

手紙（後書き）

これでお終いです。お付き合いくただきまして、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2599f/>

星の町

2010年11月27日06時18分発行